

寒暑の健康リスクと電力

がん社会 を診る

中川 恵一

高齢者で、発生病所は4割が自宅でした。「暑い家」で暮らすことにリスクがあることを示していると言えます。

日本では100年ほど前まで、月別死亡者数は8月が最多でした。冷蔵庫が普及していなかった時代、夏場は食品衛生状態が悪く、食中毒などが多かったためと思われる。冷蔵庫はヒロリ菌の感染率を下げ、胃がん患者の減少に一役買いました。

現在、日本人の死亡は冬に

多く、「低い室温」が死因の1割を占めます。しかし、将来温暖化が進むことにより状況が変わるかもしれません。

23年に発表された研究論文では、世界707都市での過去の死亡データをを用いて、今後の気候変動が世界の死亡者数に与える影響について分析しています。その結果、すべての気候変動シナリオのいずれでも、日本のような温帯地域では今後、暑い季節の死亡率は増加し、寒い季節の死亡率は減少することがわかりました。ただし、寒い季節の死亡率率は依然として高い水準を維持します。

使えることも大切でしょう。がん医療でも大きな役割を占めつつある人工知能(AI)は莫大な電力を消費します。世界のデータセンターの電力消費は26年には1000兆kWh時と、日本の年間電力消費量に相当する膨大な量に増加すると予想されています。

国内では福島での事故以来、原子力発電に厳しい目が向けられてきました。しかし、最近のエネルギー情勢や温暖化問題などの影響もあってか、世論にも変化の兆しが見られるようです。原発の安全確保はもろろんのこと、放射性廃棄物の処理も検討しながら、再稼働に向けた議論も進めるべきかと考えています。

今年も暑い夏になりました。地球温暖化が原因と思われる夏の暑さは、年々顕著になっていきます。世界で毎年のように熱波や猛暑による影響が報じられています。日本でも死亡者数は少ないとはいえ、熱中症による健康被害が増えています。

消防庁の報告によると、2023年に熱中症で救急搬送された人数は9万人を超えました。これは調査開始以来、2番目に多い人数です。搬送された人の半分は65歳以上の



イラスト 中村 久美

温暖化による地球環境の激変は、人類の存亡にもつながる大問題だと思えます。夏を涼しく、冬を暖かく過ごすことは健康を維持するのに非常に重要です。そのためにはエネルギーを安価に、安心して

首都圏の電力供給については、福島と新潟の原発が大きな役割を果たしてきました。福島は廃炉が決まっていますが、新潟の柏崎刈羽原発の再稼働については、最終局面を迎えています。私も大いに関心を持っています。

(東京大学特任教授)